



碧南ロータリークラブ週報

第2486回例会 平成22年1月27日(水)

● 会長 鈴木 並生 ● 幹事 長田 豊治 ● 会場監督 (SAA) 新美 真司

■ 例会日 毎週水曜日 12:30 ■ 例会場 碧南商工会議所ホール
 ■ 事務局 碧南商工会議所内 〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90
 TEL<0566>41-1100 FAX<0566>48-1100
 ホームページ: <http://www.hekinan-rc.jp/>
 E-mail: info@hekinan-rc.jp

■ 会報委員 岡本明弘・新美雅浩・大澤明敬・西脇博正



● 斉 唱

ロータリーソング「今日も楽し」

● 本日のメニュー

和風弁当 大正館

感謝状贈呈

第1回米山功劳者 石川唯司君



鈴木並生会長



第1回米山功劳者 石川唯司君

会長挨拶

本日は間もなく開幕する、バンクーバー冬季オリンピックに関する話をさせていただきます。選手の結団式も終わり、各選手も最終調整に入っているところではないかと思えます。日本のメダル獲得目標も、長野オリンピックの10個を目標にする等、オリンピックの話題が、新聞テレビに連日報道されるようになってきました。

特に注目というか、メダル獲得の期待がかかるのは、フィギュアスケートの、浅田、安藤、高橋、織田であり、スピードスケートでは、岡崎、15歳の高木美帆等の活躍も期待されます。他にもメダル獲得の期待のかかる競技がありますが、今日、私がお話させていただくのは、そういう花形競技ではなく、リュージュという競技種目の話です。ソリの上にあおむけに寝た姿勢のまま滑走する競技でして、直線の多いバンクーバーのコースでは、最高速度150km 前後に達するという、単純で危険な競技であります。

そのリュージュチームの秘密兵器は宇宙開発技術など日本の技術の粋を集めたハイテク国産ソリの開発であります。宇宙航空研究開発機構や東京大学の青木教授の協力を得て炭素繊維強化プラスチックを使って開発したソリでバンクーバーの高速コースに挑むそうです。

この炭素繊維強化プラスチックはF1の車体にも使われ、次世代の航空機とされるボーイング787では50%くらいこの素材を使っているそうです。これを座席部分に使用し、座席を軽くして、スチール製の刃の周辺部を重くすれば「重心が低くなって直線の走りが安定し、コーナーの操作性も向上するはず」と日本チームの強化委員長は説明しています。ヨーロッパ等の有力国は自動車メーカーなどの協力を得てソリを開発しているのに、予算の乏しい日本は、イタリアの工房に生産を依頼していたそうです。それが宇宙航空開発機構に「風洞実験ができないか」と話を持ちかけたのが縁で2007年に実験が開始され、昨年春には産学官連携事業に採用されたおかげで、資金不足の壁を乗り越え、初めて自主開発のソリが実現しました。できたソリは「従来より車高で10ミリ、重心で20ミリくらい低下した」そうです。

この差がどれくらい成績に影響するか分かりませんが、後は選手の技術に期待するところです。ただしテレビ中継があるかどうか分かりませんが、成績結果に注目したいと思います。以上で会長挨拶といたします。ありがとうございました。

幹事報告

- ・例会変更等は別紙幹事報告書の通りです。
- ・2月3日の例会はIM全員登録で2月6日(土)に振り変わり、13:45迄に安城のグランドティアラに集合頂くことになっております。万一、急遽、ご欠席される場合は、幹事までご一報下さい。



長田豊治幹事

委員会報告

〈出席奨励委員会〉

総会員数72名(内出席免除者14名の内出席者10名)出席者60名	
出席対象者 60/67名	出席率 89.55%
欠席者12名(病欠者1名)	前々回修正出席率 98.46%

〈ニコボックス委員会〉

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

栗津 康之君 本日の卓話の講師を紹介させていただきます。

藤関 孝典君 1月21日、愛知県交通安全県民大会にて、知事より優良交通安全団体として、感謝状を頂きました。

卓話

「子供と大人が一緒に何かを創り上げる場所」 劇団UP 糸氏万寿美氏

みなさんこんにちは。只今、ご紹介頂きました劇団UPの糸氏万寿美と申します。

劇団UPは碧南市の新川公民館で主な活動をしています。大人から子供(一番下で4歳の子2名)までの幅広い年齢層でひとつの舞台を創り上げるという活動をしています。活動内容として毎年、秋に本公演、2月に安城市で開催されている市民演劇祭に参加しています。今年は2月7日(日)マツバホールにて夕方5時から開催されますのでどうぞお時間のある方は観にいらして下さい。



今回はこの話をさせて頂くにあたり、昨年の本公演の際に初めて演出という立場から団員をまとめるという役割をさせて頂きましたので、その経験から、母親や女性という視点から観た子どもたちの成長という面について少し、お話させて頂きたいと思います。

劇団UPはアマチュア劇団でプロではないのですが、本公演の際にはお客様の方々にお金を払って観て頂いているので子どもたちにも少し、プロ意識を持って活動してもらいたいと思っております。小さい子がいるせいか、お客様がいて役者が輝けるということに関して、演出の立場で一番、大変だと思ったのは自分たちが「好きなことをやればいいや」と思って活動している子どもたちが多いということです。自分たちが好きなことをやれるということは、すごく幸せなことですが、好きなことをやるためには周りの支えてくれるお客様の存在であったり、裏方の存在であったり、というように周りの人たちがいてくれてこそできるということに、子どもたちはまだ気づいてくれないことが多く、自分本位のところがチラホラ見受けられます。

2月の安城演劇祭の際には演出の経験を生かして、いままで役者のみで頑張ってくれていた年齢が10代から20代の人たちに裏方の経験もしてもらおうと衣裳係や連絡係になってもらっていますが、たとえば、衣裳係を担当した人に「衣裳はきちんと準備できていますか」と聞いても「相

手が何も言っていないから何もしていない」等、他人任せになってしてしまうことがたくさんあり、みんなでひとつの舞台を創り上げていくということをひとつひとつ学んでもらっている段階です。

劇団UPの子どもたちに限らず、今の子どもたちは自分の行動に対して責任が持てない子が多いということを演出の経験を通じて感じました。たとえば、社会人になると学生の時とは違って、多少、具合が悪くても会社のことなり、取引先やお客様のことなり、相手に対する責任を考え、頑張ろうという気持ちになるものだと思いますが、子どもたちにはまだそういう自覚がないようです。ちょっと具合が悪いから、軽く練習をしておこうとか、宿題があるから休もうとか、できないことに対する言い訳はたくさん出てきますが、ではどうしたらできるのかとか、どれだけならできるのかと聞いても答えられない子が多いようです。

自分の産んだ子どもたちにも、人間はできない言い訳をたくさんすること、実際に少し発想を変えればできてしまうことも最初からできないと思い込んでできないと言っていることが多いことをよく言って聞かせています。劇団員の子どもたちにも同じようなことを教えていて、たとえば、ダンスができない子がいれば、単純にできないということではなく、自分はここまではできるのだけれどここからができないのでどうすればできるようになるのか教えてほしいというお願いのしかたであるとか、セリフが覚えられないのであれば、仲間を見つけて覚えられるまで練習に付き合っほしいとお願いするとか、できることから探して頑張っほしいと思っています。お互いに助け合って行動してほしいということを子どもたちには覚えてほしいと思っており、年齢が低くなればなるほど、自分は小さいからまだいいやというような甘えが出てきてしまい、逆に年齢の上の方の人はまだ小さいからできなくても仕方ないかというように教える前に諦めてしまっていることが多いのです。

劇団はひとりで創り上げるものではなく、役者がいて、大道具・小道具の方がいて、役者を輝かせる照明の方がいて、その役者を引き出す衣裳の方がいて、すべてみんなが揃ったうえで後は役者が舞台に命を吹き込むのがひとつの作品だと思います。私たちとしては、この劇団を通して子どもたちにより自分の自信を付けてもらい、将来的に役者のプロを目指さなくても、社会人になるまでに自分の行動に対する責任を持ち方、取り方を身につけてもらえたら良いなと思っています。

「夢、目標をもつことの大切さ」 劇団UP 眞鍋 雄二氏

はじめまして。劇団UPの眞鍋と申します。私は高校3年生から演劇に携わりまして、15年くらいこの世界で色々なことを経験させていただきました。この15年間で一番、強く思ったことは、演劇というのはコミュニケーション能力を向上させる上ではとても素晴らしい機会だということです。



今日うちの劇団にいるA子ちゃんを例にあげたいと思います。

最初はお母さんに連れられて、背中に隠れてしまい、色々と尋ねてもなかなか答えられず、自分と目を合わすこともしてくれませんでした。ところが今ではすっかり、舞台の上で良い声で良い表情で演技できる子に成長しました。

ここで少し、話は変わりますが、自分が飲食店でアルバイトしている時に家族でお父さん、お母さん、お兄ちゃん、妹の4人家族が店に入って来られたんですが、子ども二人はそれぞれゲーム機をもってゲームをやりながら、自分の顔を見ることなく、下を見ながらひたすらゲームをしながら席に座り、料理が届いても大変、器用にゲームをしながら食事を摂っていました。この家族は店にいる間、交わした会話は最初に注文したメニューを決める時だけの、「これでいいか」

「うん」という会話だけでした。一番、身近にいる大切な人との楽しいひとときであるにも拘わらず、とても残念な思いをした次第です。

演劇は相手役、観に来てくれたお客様に演技を通じて自分の気持ち、考えを伝える訳ですが、その時にお客様や相手の目を見ながら話さないと本当に伝えたいことや感動はしっかり伝わりません。A子ちゃんは最初のうちはもじもじしていて、言いたいこともはっきり伝えられませんでした。練習を重ねていくうちに少しずつ変わっていきました。そのことで演劇は人間にとって一番、大切なコミュニケーション能力を向上させる本当に良い機会だと改めて感じました。我々、大人社会も便利な世の中になって口を使って表現することがどんどん少なくなってきました。ネット社会で買い物をすることも増え、お客様と店員の会話がなくなりつつあり、口を使わず、目だけ使うようになり、これでは大人が子どもの見本を見せれていないなと感じます。自分の大切な考えや気持ちを相手に伝えたいときにはしっかりと相手の目を見て口を使うのが一番であり、ここから人間関係が始まるのではないかと言うことをこの劇団の中で自分が教えるのではなく、自分も一緒になって勉強したいと思っています。

特に子どもと大人がいる団体なのでどちらかというと大人が子どもに見本を見せる場所になっているのですが、我々大人もまだまだ誤っている所があるので自分も学ばせて頂く良い機会になっています。大人と子どもが一緒になってコミュニケーションの取り方を勉強していく必要があるのではないかと思います。

次回例会案内

平成22年 2月17日（水）卓話「サッカーにおける環境と組織論」

中本邦治氏